

牧師室から (2023.2.12)

明日(11日)は海老名文化会館でピアノコンサートがある。演奏者は仙台出身なので東北最良の私は応援も兼ねて楽しみにしている。曲目はベートーヴェンの後期3大ソナタである。晩年に彼の耳が完全に聞こえなくなってから作られたものであるが、この世を超えた彼岸の曲である。彼は私の記憶によるとカトリックで洗礼を受けているはずだが、彼の生前の遺書や例えばあの第9の歌詞(シラーのものであるが)などを見てもかなり汎神論的というか、いささか異教的、人間的である。その面では同時代のゲーテ(彼はプロテスタントで洗礼を受けているが)と通じるところがある。音楽にしても美術にしても、得てして芸術家というのは信仰についてはあまり細かくなく、拘らない傾向がある気がする。

ずっと昔ドイツ語を習い始めた頃、とても優しく素敵な先生がいて「ベートーヴェンは正確にはベートホフェンと発音するものだよ」と教えてくれたことを思い出した。その名前は北ドイツかオランダの方から由来するのであろう、訳せば〈菜園〉のようになる。また van がついているからおそらく由緒正しい家柄であったに違いない。私もそうだが皆さんも、ベートーヴェンの顔というと、教科書や音楽室にあった苦虫を噛み潰したような硬い表情の彼の肖像画がすぐ目に浮かぶのではないか。確かに大雑把に言えば作風はどちらかと言えばダイナミックで雄々しいと言えるかもしれない。学生の頃、知り合いに音大出の女性のピアノ教師がいて、好きな作曲家はと訊いたらベートーヴェンだというから、やはり雄々しいところに魅かれたのかと思ったら、「コツコツやっっていくと弾けるようになるから好きだ」という答えが返ってきたので別の意味で女性的だなと感じたことがあった。

いずれにしても明日が楽しみである。私はその3曲の内では最後の3番作品111が特に好きである。「苦難を突き抜いての喜び」(ベートーヴェン語録)

(鈴木淳一牧師)